

ウマ娘 ーひとりのトレーナーの歩みー

サンタ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それは一人のトレーナーが同期トレーナー達と切磋琢磨していく物語

目次

第1話

『おーい！母さん！こっち来てみるよ。』

『はーい。今行きますよ。』

そう言いながら赤子を抱いた清楚なウマ娘は赤子と共に声の主の所に向う。

『ほら！あの時みたいに夜空がキレイだろ。』

『全く貴男は。そんな事で呼んだのですか？』

『そんな事って、』

肩を落とし項垂れる声の主。

それを横目にしながら赤子をあやす清楚なウマ娘。

『貴方はこんな人にならないでね。』

『しかし、良く眠るな。コイツは。』

『仕事をサボって眠っていた貴男の顔にそっくりね！』

『それを言うなよ。シンザン。』

『あら、昔の呼び方に戻ってますわよ。トレーナー』

『そういうお前もな。しかし、ウマ娘から生まれるのはウマ娘だとばかり思ってたのにまさか普通の人、しかも息子が生まれとはな、ビツクリだったよ。』

『それは私も同じですわ。』

『まあ、何にせよコイツも俺と同じようにトレーナーになるとか言うのかな』

『それは分かりませんが、もしなのであれば貴男に似ないで欲しい部分はありますが、きつと貴男以上になるかもしれないね。』

『もしそう成ればお前も超えるウマ娘が生まれる事になるぜ。』

『それは私も見たい、もとい、走りたいですね。』

『俺もだよ。もつともまだ先の未来だがな。』

『そうですね。』

『なんにせよ、二人で見守ろうな？』

『はい！そうですね。』

夜空に響く二人の会話。これからこの子がどう育つかを見守りな

がら・・・

時は流れ、その時の赤子は成人になり、これから働く場所に立っていた。

男の名は神風星夜。

新人トレーナーとして、かつて自身の父親や母親が在席した「トレセン学園」に就職したのだ。

「此処が親父達が居た場所か」

「先ずは理事長に挨拶かな？ただ広すぎて場所が分からん。」

そこへ自身に向かって近寄る影が一人。

「あの一、貴方は神風さんですか。」

と声をかけられた。

「はい。駿川そうですが、貴方は？」

「はい。たづなと申します。これから宜しくお願いしますね。処でどうされたのですか？」

「お恥ずかしながら、理事長に挨拶したいのですが、場所が分からなくて困ってまして。」

「そうでしたか。でしたら私が案内致しますよ。」

「本当ですか。では、お言葉に甘えてお願いします。」

移動中

理事長室に到着し扉をノックし入室する。

そこには10数名の人が緊張しながら座っていた。

たづなさんに席に誘導され指定された席に座る。

たづなさんは理事長を呼びに部屋から退出する。

誰と会話することなく席で待つ事、数分。たづなさんが扇子を持った幼子連れてくる。その幼子が皆に向けて話し始める。

「歓迎！ようこそ中央トレセン学園へ！理事長の秋山やよいである。これから各人トレーナーとして頑張ってほしい！説明はたづなに任せー！」

「これから貴方は、トレーナーとして彼女達（ウマ娘）と契約していきます。最低でも1人以上と契約してください。2人以上になる場合

はチームとして下さい。但し、5年目以上のトレーナー経験が無い場合は5人迄となります。また5年以上でも最大12人までになります。契約後にこちらからトレーナー室を宛てがいます。また今から3ヶ月以内に契約が出来ない場合は、ベテラントレーナーのサブトレーナー又は教官として1年半の経験を積んで頂きます。また契約の有無に問わず3ヶ月は教官室が業務場所となります。その後は場所が異なりますので注意してください。今から資料及び書類を配布します。頑張ってください。」

たづなさんから書類と資料が配布される。

「紹介！皆も気になっていいるであろうから自己紹介をしよう」

「それでは右の方から順番にどうぞ！」

「黒川です。宜しくお願ひします。」

「宇山です。宜しくつす！」

「沖野です。宜しく！」

「東条です。宜しくお願ひします。」

「神風です。宜しくお願ひします。」

と順番に自己紹介が続き、全員の自己紹介が終了した。

理事長が最後に

「皆の今後の活躍に期待する！」

とのお言葉で説明会は幕を閉じた。